



流浪の船

その老人は、一生を海の上で過ごした。
老人は、海から生まれ、今、海の底へ帰ろうとしていた。

彼が生まれたのは父親の船の上だった。
やがて15才になった彼は、自分の船に乗って海へと漕ぎ出した。
なぜそうしたのは自分でも分からない。
「それが大人になるってことさ」
海の上で出会った‘大人’達は皆、同じことを言った。
彼の航海は、決して楽しいだけのものではなかった。
逆風に、帆を折られたこともあった。
幾日も幾日も、魚が釣れない時もあった。
いっそ船を捨てようかと海の底を見つめて悩んだことも、荒波を避けてどこかの無人島で暮らそうかと考えたことも、少なからずあった。
しかし、彼は船を漕ぐことを止めなかった。
船が壊れれば、黙々とそれを修理した。
魚が釣れなければ、釣れるまでいくらでも待った。
そして、彼は知った。
嵐が去った後の、海の穏やかさを。
信じて努力を続ければ必ず、海は生きる糧を与えてくれることを。
彼は自分の暮らす世界の、美しさと寛容さを知った。

今、老人は海を見つめている。
海も、老人を見つめている。
やがて老人は、つぎはぎだらけの船と共に、安らかに海へと帰っていった。